

昭和前期の文学界における〈通俗性〉の問題 — 「宝塚文芸図書館」から見た〈読者〉 —

清水 康次

はじめに

筆者は、平成 19 年度、本学の「国内研究」制度を利用し、大阪大学文学研究科に「私学研修員」として在籍し、日本近現代文学の研究と近現代の書誌の研究とをテーマとして、1 年間の研修をする機会を得た。（貴重な機会を与えていただいた本学ならびに学園と、受け入れていただいた大阪大学文学研究科および出原隆俊教授に心よりお礼申し上げます。）大阪大学での資料調査や同大学の院生たちとの共同研究に加えて、近隣に位置する「阪急学園池田文庫」の蔵書調査にも取り組んだ。その蔵書調査は、池田文庫の協力と支援を受けて、筆者の予想以上に興味深いものとなっていき、昭和文学の研究に大きな示唆を与えてくれるものとなった。筆者は、近代文学の作品研究と並行させて、夏目漱石についての書誌・芥川龍之介についての書誌^(註1)など、文学作品の書誌を研究してきたが、近年は、昭和期の文学と昭和期の書誌や出版に関心が移ってきている。今回の「国内研究」においては、研究の基本姿勢について教えられることが多く、多種多様な萌芽的な発見を得た。まずは、池田文庫での一連の調査と考察を論文にまとめて、今後の研究のスタート・ラインとしたい。

初めに池田文庫の紹介として、現在の館のパンフレットの文章を挙げておく。

池田文庫は昭和 24 (1949) 年に開館しましたが、その歴史はさらに遡ることができます。阪急東宝グループの創設者である小林一三（雅号・逸翁）は明治 44 (1911) 年に宝塚新温泉（後の宝塚ファミリーランド）を開業しました。その中に新聞や雑

誌を閲覧できる図書館を設けたのですが、大正3（1914）年から新温泉の余興として宝塚少女歌劇が創設されると、それらの資料も収集保存するようになりました。さらに、昭和7（1932）年には、演劇の専門図書館を目指して宝塚文芸図書館を設立し、内容の充実に努めました。そして、昭和24年、これらの蔵書を池田の街に移し、財団法人阪急学園池田文庫としてあらたに出発、さらなる資料収集と整理に力を注いで今日に至っています。21世紀となった今、収蔵図書11万冊、雑誌9万冊を数え、殊に阪急電鉄・宝塚歌劇・歌舞伎関係の資料群は当館の誇りであり、多くの方々注目を集めています。

本論文は、昭和の戦前・戦中期（昭和1（1926）年～20（1945）年、以下、この期間を「昭和前期」と呼ぶ）を対象とし、ほぼ上記の「宝塚文芸図書館」の期間（昭和7（1932）年～24（1949）年）に相当する時期の館の活動と蔵書を見ながら、当時の読者像を探り、〈通俗性〉という問題について考えようとするものである。

なお、宝塚と宝塚歌劇に関しては、近年、改めてその歴史や意味づけが注目されてきており、川崎賢子『宝塚 消費社会のスペクタクル』（1999.1、講談社選書メチエ）、同『宝塚というユートピア』（2005.3、岩波新書）、植田紳爾『宝塚 百年の夢』（2002.10、文春新書）、津金澤聡廣『宝塚戦略 小林一三の生活文化論』（1991.4、講談社現代新書）、津金澤聡廣・名取千里編著『タカラヅカ・ベルエポック』（1997.9、神戸新聞総合出版センター）、同『宝塚モダニズムは世紀を超えて タカラヅカ・ベルエポックⅡ』（2001.1、同）など、多数の研究書・紹介書が刊行されている。『タカラヅカ・ベルエポックⅡ』には、大内昌子「阪急学園そして池田文庫・宝塚文芸図書館」が収録されているが、この1編は、数少ない「宝塚文芸図書館」に関する文献である。本論文中には、この文章の前身である『館報 池田文庫』連載の大内氏の「池田文庫の沿革」を用いた。ほかに、竹村民郎・鈴木貞美編『関西モダニズム再考』（2008.1、思文閣出版）などにも宝塚にかかわる論考がある。

1 昭和前期の「宝塚文芸図書館」と館をめぐる状況

図書館史において、大正時代は、国の奨励策の下に、各地に公共図書館が次々と設置され、社会教育の拠点となり始めた時代であった。

大正期の日本の公共図書館は飛躍の時代を迎えていた。とくに市民の図書館は実質的な成長をとげていた。大正2年に「簡易図書館」から「自由図書館」と名称を変えた公共図書館は、全国でその数が624館であったが、大正11年の『全国図書館に関する調査』によれば、総数は公共図書館が1640館、巡回文庫1682、合わせて3342館となっていた。その内訳は、59%にあたる943館が公立図書館であり、41%にあたる697館が私立図書館であった。

(寺田光孝・藤野幸雄『図書館の歴史』1994.3、日外アソシエーツ)

各府県で図書館設置が奨励され、第一次世界大戦後の好景気を追い風にして、多くが小規模であったが、大正期の10年間に千を超える図書館が新設された。

私立公共図書館としては、大正末期から昭和にかけて、光丘文庫、東京の青山会館図書館、川崎の大師図書館、銚子の公正図書館、野田の興風会図書館、近畿では宝塚文芸図書館、奈良の天理図書館、滋賀県の近江兄弟社図書館、京都の和風図書館、(中略)など全国的に多数の私立図書館が設立され、これらの私立公共図書館のなかには神社、寺院あるいは教団などの設立するものも多く、日本宗教界の社会進出が目だっていた。(草野正名『三訂 図書館の歴史』1975.9、学芸図書株式会社)

宝塚文芸図書館は、近畿では、天理図書館や近江兄弟社図書館とならぶ数少ない私立公共図書館として開館する。しかも、宗教とのかかわりのない、一企業の設立した図書館という特殊な存在であった。

宝塚文芸図書館の設立母体である阪急電鉄は、明治44(1911)年5月に、「宝塚新温泉」(のちの宝塚ファミリーランド)の営業を開始する。

旧来の温泉町とは対照的なこの洋風の温泉リゾート地は、予想をはるかに超えるにぎわいをもたらし、入場者は一日一二〇〇人を数えた。(中略)新温泉の敷地内に洋館を増築し、「宝塚新温泉パラダイス」と命名、日本初の屋内プールを中心に音楽室や陳列室を設けた。(橋爪紳也『日本の遊園地』2000.9、講談社現代新書)

大正3(1914)年4月からは、宝塚少女歌劇の上演が始まり、新温泉は大きく発展していく。この新温泉の一室に設けられていた「図書室」が、宝塚文芸図書館の母胎である。新温泉は、大正12(1923)年、火災によって多くの施設が焼失するが、その再建を拡大に変え、大劇場や「宝塚ルナパーク」が建設されていく。その時期に、「図書室」の拡充も計画される。そして、昭和7(1932)年1月に、宝塚文芸図書館が開館することになる。大内昌子「池田文庫の沿革(一)一宝塚文芸図書館として一」(『館報 池田文庫』1号、1992.4)は、開館当時の様子を次のように記している。

宝塚文芸図書館は、昭和六年九月着工、同年十二月三十日落成、翌年一月一日開館した。昭和六年十一月末から十二月にかけて、大阪毎日新聞をはじめとして各紙に写真入りでその完工を報道しているが、それによれば
——建坪約三百余坪、鉄筋混凝土(こんくりーと)、三階建の宏壮な近代的セセッション風——

とあって、大正十五年に計画し、そして発表された規模に比べ、倍する程の当時としては立派な建物になっている。一階と二階は閲覧室、三階を講演会や展覧会の会場とし、開館記念として「ドイツ演劇写真展」を開催している。(中略)図書館の利用については会員制として、月一円(三ヶ月分ずつ前納)で三ヶ月間に十二回の図書貸出しをうけることが出来、更に会員は新温泉入場無料、各種催し物入場無料の特典のあることを報じている。

当初は、利用が新温泉への入場者に限られていたが、昭和11(1936)年5月20日からは一般の入館を無料とした^(注2)。同年7月からは『宝塚文芸図書館月報』^(注3)を発刊し、演劇関係の文献の紹介が始まる。『月報』第2号(昭和11(1936)年8月)の堤誠二「宝塚文芸図書館に就いて」には、次のようにある。

宝塚文芸図書館は貸出図書館にして且参考図書館としての体容を兼備してをる、即ち宝塚新温泉の一設備として広く一般人の読書の利益、読書趣味の普及を計る為に館内にて自由に図書の閲覧を得せしむると共に尚館外貸出の便も許してをる、他方に於いて又宝塚少女歌劇関係に対して、その方面に必要な資料も蒐集在庫して演劇に関する特殊なる要望に応じてをる。依而現今一般図書館の二大種別を一つに兼ねてをると云ふべく、自然その為に蔵書の範囲も限定せられず一般通俗図書を備付けてをるも主として蒐集してをるのは演劇に関する種類の図書である。

宝塚文芸図書館は、宝塚新温泉という湯治と観劇を柱とした遊興の施設の中にあつて、社会教育を旨とする公共図書館として発足する。同時に、宝塚歌劇にかかわつての資料収集の役割も課せられており、娯楽と社会教育、さらに演劇関係の専門図書館という、3つの性格を共存させていたといえる。

昭和12(1937)年には、蔵書数が二万冊を超えた記念に、会員に「宝塚文芸図書館」のタオルを配布する。こうしたサービスは当時の公共図書館においては異例であり、賛否半ばする注目を増すことになる。利用者はふえていき、『月報』第12号(昭和12(1936)年6月)によれば、前年の5月に入館を無料としてからの1年間の来館者はのべ48,055人にのぼる。そのうち、新温泉を兼ねての来館者は36,487人、図書館独自の来館者は11,568人であったという。

館が形を整え、利用者がふえていけばいくほど、なおさら、社会教育のための公共機関という面と、利潤追求を目的とする一企業の設備という面が両立できるのかどうか、疑念のこもった視線を受けることになる。

宝塚文芸図書館を訪れた、神戸市立図書館の原田定夫の「印象記」がある。

宝塚新温泉案内図オ展ゲテミルト、ソナカニ温泉アリ、劇場アリ、動物園アリ、植物園アリ、ルナパークアリ、図書館アリデアル。

宝塚文芸図書館ガソノ月報ニ云ウ如ク“宝塚新温泉ノ一設備トシテ”ノ存在オ実証シテ余リアル。宝塚文芸図書館オミル上ニ於テ、最モ重要ナ事ワ、コノ図書館ガ阪急ト云ウ一営利会社ニ所属シテイルト云ウコトデアル。総テノモノガソノ己ノ所属スルトコロノモノニ従ッテユカネバナラスト云ウツノ法則ノ下ニ「一営利会社

ノ事業ノ一部分」〈月報創刊号〉デアルコノ図書館モ畢竟営利ト云ウモノ、上ニ計算サレテ立ッテイルモノト云エヨォ。(中略)コノ図書館ニアッテワ、一昨年ノ5月20日、図書館ノ正門オ開放シテ温泉来遊客ノミニ限定セズ一般ノ人々オモ迎エ(シカモ無料デ)社会事業的色彩オ加エタコトワ正ニ「図書館ノ創設以来ノ画期的大事件」〈月報第2巻第6号〉ニ価シタコトデアッタデアロォ。(原田定夫^(註4)・落合重信「兵庫県下各図書館印象記」『図書館研究』^(註5)第11巻第1号、昭和13(1938)年1月)

原田は、「宝塚文芸図書館オミル上ニ於テ、最モ重要ナ事」は「阪急ト云ウ一営利会社ニ所属シテイル」ことであるという。利益や採算を度外視しなければなりたないはずの社会教育という公共図書館の使命が、利益追求を目的とする一企業の施設に果たせるのかどうかと、原田は疑いの目で問う。昭和前期という、私立大学はすでに一般的であったが、私立図書館はまだごく少数で特殊な存在でしかなかった時代を考えれば、原田の疑念は無理のないものであったかもしれない。しかし、公益か私益かという問題は、図書館の経営者が公益と私益との選択基準を明確に定めれば、かならずしも解決困難な問題ではない。私立図書館も、社会に定着していけば、公立図書館に劣らない公共性を備えうる。その問題と重なりあいながら、より解決の難しいもう一つの問題は、原田が次のように付け加えていくときに見えてくる問題である。

新温泉来遊客ニドノ程度ノ存在意義ガアルデアロオカ、ココニ来ルトコロノ人々ノ殆ドガ歌劇目当テノ人々デアル。ソノ人々ラニトッテワソナニマデ必要トサレテイナイノデワナカロオカ。ソシテマター一般ノ人々ニシテモ地理的ニ云ッテ、利用ニ困難ナコハワ免レマイ。コノ図書館ノ意義コソワ、演劇参考図書館トシテアルノデアロォ。(同上)

公共図書館が新温泉の娯楽施設として適合できるのかどうか。公共図書館の来館者には、読書や新聞の閲覧、勉強や思索という、明確な目的意識があるはずであり、その目的意識に応ずるところに、公共図書館の「存在意義」がある。温泉への入湯、少女歌劇の観劇、ルナパークでの遊興が目的で来る、新温泉の客たちには、その目的意識が弱く、公共図書館の来館者としてはふさわしくな

いのではないか。原田は、公共図書館の使命を高い教育理念において捉えている。問題は、高い理念から発する働きかけと、遊興のついでにという応答との間にあるへだたりである。公益か私益かという問題が、図書館の内部で解決すべき問題であるのに対して、この問題は、図書館と来館者の関係の問題であるといえる。原田は、むしろ、「コノ図書館ノ意義」を「演劇参考図書館」に限定して考えようとする。

当時の『図書館研究』の誌上において、宝塚文芸図書館はしばしば話題になり、図書館界は、その動向に着目していた。このような視線に対して、宝塚文芸図書館の館長である戸沢信義^(注6)は、次のように答えている。

宝塚文芸図書館ガ営利会社デアル阪急電鉄ノ経営ノ下ニ立チ、平常公益事業トシテ誠ニ潔イロキイテ居ッテモ営利ノ為ニハ多少ノ割愛ヲ公益ニ削イテモ致方ナイ事デ、清盛ノ衣ノ袖ニ鎧ノホノ見エル位ノ矛盾ハマヅ御許シ願イタイ。(中略) 当館へ来ル閲覧者モ亦心得タモノデ、当館ガアルマ、ノ設備ノ範囲内デ利用シソレ以上ノ過大ナ要求ハセヌ。吾々ガ幾ラアセッテモ吾々ト同ジピッチノ馳足デ閲覧者ガクツツイテ来様トハ思ヘナイシ、管ラナイ本バカリ読ンデ居ル閲覧者ヲ考ヘルト何故吾々ハ斯ウモ働カネバナラヌカト唧チタクナル。

(「宝塚タヨリ」『図書館研究』第12巻第3号(昭和14(1939)年10月))

戸沢は、公益か私益かという問題については、館が持つ〈公〉と〈私〉の矛盾を認めつつ、それを「清盛ノ衣ノ袖ニ鎧ノホノ見エル位ノ矛盾」とし、「致方ナイ事」として「御許シ願イタイ」と言う。たとえ私益を追求する局面があったとしても、肝心なところで公益優先を見失わずに運営していけば、公共図書館としての使命は果たせる、というのが戸沢の反論であり、それは私立の公共図書館の姿勢として正当であったといえる。そのこととは別に、戸沢は「管ラナイ本バカリ読ンデ居ル」来館者に不平をもらしている。矛盾を抱えていても、自分たちは理想に向かって努力している。しかし、「吾々ト同ジピッチノ馳足デ閲覧者ガクツツイテ来様トハ思ヘナイ」。戸沢もまた、原田と同様に、公共図書館の使命を高く捉え、その理念に向かっての〈内部〉の努力と、実際の〈外

部)からの反応とのくいちがいにほぞを噛んでいる。

二人が指摘する問題は、いわば、理想に向かう内なる営みの〈聖〉と、それを受け止める外からの応答の〈俗〉との亀裂である。それは、実は、この館だけの問題ではなく、昭和前期の公共図書館が等しく抱えていた問題であったが、当時、多くの公共図書館は、来館者の〈俗〉を拒む方向、いいかえれば、上からの理想を来館者に押しつける方向に問題の解決を見出していた。これに対して、宝塚文芸図書館においては、逆に来館者の〈俗〉を受け入れる方向に問題の解決を求め、その結果、年間にのべ五万人近くという入館者を獲得し、よく読まれて、傷みのはげしい本を残すことになる。さらに、後に見るように、この〈聖〉なる理念と〈俗〉なる応答との亀裂は、その本を生み出していた昭和前期の文学界にも認められるのである。「宝塚新温泉案内図才展ゲテミルト、ソナナカニ温泉アリ、劇場アリ、動物園アリ、植物園アリ、ルナパークアリ、図書館アリデアル」という、この特殊な図書館は、遊興施設という〈俗〉の中の、社会教育機関という〈聖〉なる場所として、複雑な対立軸を抱えていくが、その位置は、昭和前期の時代性をもっとも先鋭化した場所であったといえるだろう。

『図書館研究』は、「青年図書館員聯盟」^(注7)の機関誌であるが、戸沢信義は、この「青年図書館員聯盟」に昭和9(1934)年に入会し、昭和14(1939)年度からは「理事員」に選任されている。「青年図書館員聯盟」には、関西を中心に、全国の図書館員たちが集まり、現場からの図書館改善の活動を展開していく。その活動は、図書館活動の機能や実務の改善に大きな寄与を成し遂げていくが、時代が戦争へと傾斜していく中で次第に活動が制限されていく。戸沢は、昭和17(1942)年度には「理事員主席」という会を代表する役割につき、戦時での「青年図書館員聯盟」の解散にも、代表者として立ち会っていく。

複雑な対立軸を孕んだ図書館に、次第に戦争への流れが押し寄せる。

昭和6年の満州事変から、日本は国家主義の方向に進み、昭和12年に全面的な日中戦争に入ると、戦争が図書館にも影を落とすようになっていた。(中略)市立図書館では、昭和13年から、巡回文庫と称して、「国民精神の強化」と戦争の遂行に資

するための「選定図書」、50冊づつの文庫二箱を回覧し始めていた。同時に、思想、出版に対する統制は、市民の読書にまで及び、警察からは図書館で閲覧を禁止すべき図書の一覧表が回覧されていた。

(寺田光孝・藤野幸雄『図書館の歴史』1994.3、日外アソシエーツ)

戦時体制下では、すべての図書館は愛国心の教育の場となり、戦意高揚のための宣伝施設と化していく。公共図書館の高い教育的理念は、国家統制の浸透に利用されやすい一面を持っていたといえる。まして、娯楽性の高い公共図書館など、不必要な時代であった。

思想統制も一段と厳しくなり、憲兵が頻々と閲覧図書を調査に来館、刑事も石坂洋次郎の『若い人』の中学生閲覧者名を調べるといったことまで行なわれ(弘前市立)、削除処分を命じて図書の一部を切抜く作業も増加、閲覧禁止の指定をうける図書も、戦況悪化にしたがって増加していった。そうして、昭和19年には、菊池寛『貞操』、加藤武雄『彼女の貞操』、久米正雄『嘆きの市』、上田貞次郎『産業革命史』などまで、閲覧禁止を命ぜられたのである(『千代田図書館八十年史』千代田区、1968年)。(石井敦『日本近代公共図書館史の研究』1972.2、日本図書館協会)

昭和18(1943)年に、「宝塚文芸図書館」は「宝塚科学図書館」に改称される。すべてが戦時体制、国家中心に移行していく時代の流れを受けて、看板から「文芸」を除いて「科学」に変え、その運営方針を「苛烈果敢ナル現下ノ決戦体制ニ鑑ミ科学精神振興普及ノ国策ニ即応」させていったという(大内昌子「池田文庫の沿革(二)一宝塚文芸図書館として一」(『館報 池田文庫』2号、1992.10))。『月報』第92号(昭和18(1943)年11月)の巻頭言(「宝塚科学図書館」)は言う。

演劇又は美術に関する仕事よりも科学に関して国家はより切実なる要求を持つてをるのではなからふか。これに対して図書館は何を為すべきか? 思ひ茲に到つて吾々は翻然身を転じて科学図書館に改める事にした。これについては何等弁明の余地なく又その必要を認めない。

そして、敗戦を迎える。昭和 24 (1949) 年 4 月、新たに「池田文庫」が開館し、宝塚文芸図書館は閉館となる。大内氏によれば、昭和 26 (1951) 年に完成した池田文庫の書庫に、「宝塚文芸図書館から蔵書三四、五七〇冊を移管」したとされている。

宝塚文芸図書館の鉄筋コンクリートの「宏壮な三階建」の建物は、昭和 25 (1950) 年 4 月からは「宝塚音楽学校」の校舎として利用される。そして、音楽学校の移転の後は「宝塚歌劇記念館」に変わり、長く宝塚ファミリーランドの中の一施設として運営された。平成 7 (1995) 年 1 月の阪神淡路大震災の被災を経て、一旦は復興したものの、平成 15 (2003) 年 4 月、宝塚ファミリーランドは閉園の日を迎える。かつての宝塚文芸図書館の建物もこの時に閉鎖されたが、現在は中華料理店として再生しているということである。

さて、大内氏の「池田文庫の沿革」の中に、次のような文章がある。

池田文庫の書庫内の未整理図書の中に、この草創の時代に多くの人に読まれたらしい手ずれのした大衆小説の一群がある。いづれも宝塚文芸図書館のゴム印が押しであり、裏表紙の内側には閲覧票を入れる小さい紙袋がはってあり、時には利用した人の氏名なども書いてあってたいへん興味ぶかいものであるが、これらの本はある時期に廃棄処分としたらしく段ボールに詰め込まれていたのを、いまは、書架に並べていつの日か再登録し一般書架に配架したいと考えているが、時を経てこれらは書誌研究の上にも、また、「近代文学展」などの展示をするときにも大切な図書となっている。

今回調査した本とは、この「多くの人に読まれたらしい手ずれのした大衆小説の一群」である。大内氏の点検以前、あるいは以後に廃棄されたものもあると考えられるが、現在では、本棚にして三連足らずの「一群」の本である。一部、戦後のものや別の資料もあり、大正期のものも含まれているが、ほとんどが昭和前期の刊行の図書であり、修理や再製本が施されている本が多く、いかにも多数の人々に読まれたことが実感される。中には、何ページか本文がちぎれて

いるもの、奥付等を欠くもの、ひどく傷んだものもあり、多くが「廃棄処分」相当と判断されても無理のないものである。これら以上に傷んだ本も数多くあったのではないかと想像され、既に廃棄されたものも少なくはなかつただろうと推測される。従って、この一群の本がもっともよく読まれた本であるとはいえないが、もっともよく読まれた本の一部を含んでいるとはいえるだろう。今回の調査は、この一群の本の中から、昭和前期に刊行されたもののみを対象とし、一部省略しつつ、この一群の全容を捉えることを考えて、全体の半分程度にあたる240点を調べたものである。そのリストを掲げ、昭和前期に、あの宝塚文芸図書館に、実際に、どのような本があったのか、どのような本が読まれていたのかを見ていきたい。

2 調査した図書のリスト

	書名	著者名	出版社	初版発行年月日
1926（大正15・昭和1）年				
1	青蛙堂鬼談 綺堂読物集2	岡本綺堂	春陽堂	1926(T15).3.25
2	一週間	リペデインスキー、池谷信三郎訳	改造社	1926(T15).5.10
3	日輪 前編	三上於菟吉	新潮社	1926(T15).6.28
4	赤い屋根	谷崎潤一郎	改造社	1926(T15).9.25
5	江戸奇談 春宵和尚奇縁	大仏次郎編	博文館	1926(T15).10.25
6	恋愛曲線 創作探偵小説集5	小酒井不木	春陽堂	1926(T15).11.13
1927（昭和2）年				
7	大海のほとり ストリントベルク全集	ストリントベルク、斉藤响訳	岩波書店	1927(S2).1.25
8	恐ろしき凝視 創作探偵小説集6	甲賀三郎	春陽堂	1927(S2).3.20
9	闇に蠢く 世界探偵文芸叢書6	江戸川乱歩	波屋書房	1927(S2).5.16
1928（昭和3）年				
10	女	マグダレン・マルクス、山田わか訳	平凡社	1928(S3).2.1
11	泊夫藍（サフラン）	吉屋信子	宝文館・大阪宝文館	1928(S3).2.7
12	あぢやらもくれん 漫談叢書5	正岡蓉、柳家金語楼	聚英閣	1928(S3).4.15

13	恋愛の道	アレクサンドラ・コロンタイ、林房雄訳	世界社	1928(S3).4.18
14	江戸三国志 前篇	吉川英治	平凡社	1928(S3).7.5
15	怪談全集 現代篇	田中貢太郎	改造社	1928(S3).7.13
16	職工と微笑	松永延造	春陽堂	1928(S3).9.12
17	江戸三国志 中篇	吉川英治	平凡社	1928(S3).12.20
1929 (昭和4) 年				
18	当世浮世大学 現代ユウモア全集 10	大泉黒石	現代ユウモア全集刊行会	1929(S4).1.20
19	快傑伝 伊藤痴遊全集 第八卷	伊藤痴遊	平凡社	1929(S4).4.15
20	大衆文学集 第二集 昭和四年版	文芸家協会編	新潮社	1929(S4).5.14
21	果樹	水上瀧太郎	改造社	1929(S4).5.15
22	大下宇陀児集 日本探偵小説全集 9	大下宇陀児	改造社	1929(S4).5.28
23	保篠竜緒 日本探偵小説全集 8	保篠竜緒	改造社	1929(S4).6.25
24	読物集 両国の秋	岡本綺堂	資文堂書店	1929(S4).7.20
25	佐藤春夫・宇野浩二篇 現代長編小説全集 20	佐藤春夫・宇野浩二	新潮社	1929(S4).10.1
26	女心風景	岡成志	改善社	1929(S4).11.10
27	舶来微笑集 ゆうもあ叢書 2	春江堂編輯部編	春江堂	1929(S4).11.25
28	夢野久作集 日本探偵小説全集 11	夢野久作	改造社	1929(S4).12.3
29	からす組 前編	大仏次郎	改造社	1929(S4).12.3
30	真鍮の真操切符 ―プラス・チェッカー	アンプトン・シンクレーア、早坂二郎訳	新潮社	1929(S4).12.6
31	軍隊病 日本プロレタリア作家叢書 5	立野信之	戦旗社	1929(S4).12.27
32	賃銀奴隷宣言	岩藤雪夫	南蛮書房	1929(S4).12.27
1930 (昭和5) 年				
33	山下利三郎・川田功集 日本探偵小説全集 15	山下利三郎・川田功	改造社	1930(S5).1.10
34	角田喜久雄集 日本探偵小説全集 12	角田喜久雄	改造社	1930(S5).2.3
35	夫婦戦線異状なし	原田宏	中村書店	1930(S5).2.27
36	笹川の繁蔵	子母沢寛	塩川書房	1930(S5).3.8
37	ジャンヌ・ネイの愛	イリヤ・エレンブルグ、河村雅訳	春秋社	1930(S5).3.15
38	ヴェランダの椅子 現代ユウモア全集 22	牧逸馬	現代ユウモア全集刊行会	1930(S5).3.30

39	高架線 新興芸術派叢書	横光利一	新潮社	1930(S5).4.3
40	女群行進 新興芸術派叢書	浅原六朗	新潮社	1930(S5).4.7
41	恋を吹く喇叭 現代ユウモア全集 23	佐々木味津三	現代ユウモア全集刊行会	1930(S5).4.30
42	金	三宅やす子	先進社	1930(S5).5.1
43	月見草外十二篇 令女文学全集 11	加藤まさを	平凡社	1930(S5).5.15
44	蘆江情話集 五月雨日記	平山蘆江	平凡社	1930(S5).5.20
45	政界疑獄実話 明治大正実話全集 1	伊藤痴遊	平凡社	1930(S5).6.28
46	なつかしき現実 新鋭文学叢書	井伏鱒二	改造社	1930(S5).7.3
47	亜米利加の悲劇 (上巻)	テオドル・ドライザー、田中純訳	大衆公論社	1930(S5).8.8
48	奥州流血録	今東光	先進社	1930(S5).8.16
49	海のあなた外八篇 令女文学全集 15	水谷まさる	平凡社	1930(S5).9.10
50	武器よ・さらば	ヘミングウェイ、小田律訳	天人社	1930(S5).9.12
51	ドレフュス事件 新世界叢書 2	大仏次郎	天人社	1930(S5).10.25
52	夜会服 アメリカ尖端文学叢書	ハーゲスハイマー、宮島新三郎訳	新潮社	1930(S5).11.5
53	娼婦と暮して一ヶ月	マリズ・ショワジ、松尾邦之助訳	新時代社	1930(S5).12.1
1931 (昭和 6) 年				
54	尖端短篇集 付黒人文学集 アメリカ尖端文学叢書	佐藤義亮編、早坂二郎他訳	新潮社	1931(S6).1.1
55	ドルジェル伯の舞踏会	レイモン・ラディゲ、堀口大学訳	白水社	1931(S6).1.10
56	モルナアル小説集 奥さんは嘘つき	フエレンツ・モルナアル、鈴木善太郎訳	第一書房	1931(S6).3.15
57	新酒古囊	リリアン・ローリングス、川崎愛漢訳	大阪宝文館・宝文館	1931(S6).3.30
58	猟奇情史 日米を股にかける女	岩永清一郎	泰光社	1931(S6).4.10
59	南国太平記 前篇	直木三十五	誠文堂	1931(S6).4.14
60	戦争	ルウドウイヒ・レン、滝本次郎訳	博文館	1931(S6).4.22
61	女五人の謎 新でかめろん叢書	松本泰	四六書院	1931(S6).5.2
62	山・都会・スキー 新でかめろん叢書	石川欣一	四六書院	1931(S6).5.2
63	ハリウッド・ガール 新でかめろん叢書	森岩雄	四六書院	1931(S6).5.2

64	精鋭十人傑作集 小説	文学評論編輯部編、 武野藤介他著	現代評論社	1931(S6).6.1
65	山岳短篇小説集 三人と死	坂部護郎編	四六書院	1931(S6).6.15
66	江戸城心中	吉川英治	先進社	1931(S6).6.16
67	南国太平記 中篇	直木三十五	誠文堂	1931(S6).6.29
68	大衆文学集 第四集 昭和六年 版	文芸家協会編	新潮社	1931(S6).7.1
69	脚のある巴里風景	岩田豊雄	白水社	1931(S6).7.10
70	金子ふみ子獄中手記 何が私 をかうさせたか	金子ふみ子	春秋社	1931(S6).7.10
71	江戸川乱歩全集 第四卷	江戸川乱歩	平凡社	1931(S6).8.10
72	戦後に咲く花	庄野貞一	赤蝸房	1931(S6).8.20
73	遍路行	下村千秋	中央公論社	1931(S6).8.21
74	何処へ行く？	徳永直	改造社	1931(S6).9.18
75	彼女の太陽・焰の歌・血闘 長 篇三人全集 1 8	三上於菟吉	新潮社	1931(S6).11.10
76	生活線 A B C	細田民樹	中央公論社	1931(S6).12.1
77	静かなるドン 第三 ソヴェート 作家叢書	シヨーロホフ、外 村史郎訳	鉄塔書院	1931(S6).12.5
78	女性西部戦線	丸木砂土	風俗資料刊行 会	1931(S6).12.28
1932 (昭和7) 年				
79	グランドホテル	ウイツキー・パウ ム、新居格訳	創建社	1932(S7).3.1
80	笑ふ男・笑ふ女	十一谷義三郎	白水社	1932(S7).3.1
81	女給君代	広津和郎	中央公論社	1932(S7).3.1
82	白い姉	大仏次郎	改造社	1932(S7).5.14
83	桧山兄弟 上巻	吉川英治	新潮社	1932(S7).7.22
84	限りなき舗道	北村小松	中央公論社	1932(S7).9.21
85	若き日の芸術家の肖像	ジェイムズ・ジョ イス、小野松二・ 横堀富雄訳	創元社	1932(S7).10.2
86	獣人の獄 新作探偵小説全集	水谷準	新潮社	1932(S7).10.5
87	楠木正成	直木三十五	中央公論社	1932(S7).11.23
88	雅歌	横光利一	書物展望社	1932(S7).12.25
89	モンパルノ	ジョルジュ・ミシェ ル、折田学訳	第三書院	1932(S7).12.25
1933 (昭和8) 年				
90	桧山兄弟 下巻	吉川英治	新潮社	1933(S8).3.23
91	男装の麗人	村松梢風	中央公論社	1933(S8).4.25
92	東雲 (しのめ) は瞬く	賀川豊彦	実業之日本社	1933(S8).6.20
93	明暗三世相 直木三十五全集 第九卷	直木三十五	改造社	1933(S8).7.16

94	をんな一匹	フランシス・カルコ、永田逸郎訳	春秋書房	1933(S8).8.1
95	長谷川伸篇 新選大衆小説全集 11	長谷川伸	非凡閣	1933(S8).10.10
96	ケンネル殺人事件	ヴァン・ダイン、延原謙訳	新潮社	1933(S8).10.15
1934 (昭和 9) 年				
97	細田民樹篇 新選大衆小説全集 14	細田民樹	非凡閣	1934(S9).2.10
98	過去	広津和郎	岡倉書房	1934(S9).2.18
99	埴侯爵一家	横溝正史	新潮社	1934(S9).2.24
100	神風連 上巻	十一谷義三郎	中央公論社	1934(S9).2.25
101	神風連 下巻	十一谷義三郎	中央公論社	1934(S9).2.25
102	逃亡記 (文芸復興叢書)	井伏鱒二	改造社	1934(S9).4.20
103	勘定 (文芸復興叢書)	武田麟太郎	改造社	1934(S9).5.2
104	湯河原三界 (文芸復興叢書)	宇野浩二	改造社	1934(S9).5.6
105	蹇音 (文芸復興叢書)	竜胆寺雄	改造社	1934(S9).5.11
106	三十女	バルザック、和田顕太郎訳	文化公論社	1934(S9).5.18
107	金色藻・街の毒草	大下宇陀児	新潮社	1934(S9).5.28
108	丹下左膳 こけ猿の巻 一人三人全集 9	林不忘	新潮社	1934(S9).6.25
109	風雨強かるべし	広津和郎	改造社	1934(S9).7.18
110	母の手	レオン・フラピエ、深尾須磨子訳	平凡社	1934(S9).9.22
111	賭博場 (カジノ) 殺人事件	ヴァンダイン、伴大矩訳	日本公論社	1934(S9).12.20
1935 (昭和 10) 年				
112	修養太閤記	矢田挿雲	千倉書房	1935(S10).2.11
113	青春行路	広津和郎	三笠書房	1935(S10).6.15
114	緯度殺人事件 世界探偵傑作叢書 2	ルーファス・キング、田島滋三訳	黒白書房	1935(S10).9.10
115	蒼氓	石川達三	改造社	1935(S10).10.20
116	傑作探偵小説 狂楽師	大下宇陀児	春秋社	1935(S10).12.10
117	金環蝕	久米正雄	新小説社	1935(S10).12.25
1936 (昭和 11) 年				
118	戦争小説集・惨虐小説集 モーパッサン傑作短篇集 5	モーパッサン、翻訳代表者辰野隆	河出書房	1936(S11).1.16
119	闘牛士 フランス現代小説	アンリ・ド・モンテルラン、堀口大学訳	第一書房	1936(S11).2.10
120	中篇小説集 モーパッサン傑作短篇集 6	モーパッサン、翻訳代表者渡辺一夫	河出書房	1936(S11).2.17
121	あひびき	宇野千代	新陽社	1936(S11).3.20

122	野麦の唄	林芙美子	中央公論社	1936(S11).3.21
123	大楠公	大仏次郎	改造社	1936(S11).6.4
124	死化粧する女 かきおろし探偵傑作叢書	甲賀三郎	黒白書房	1936(S11).6.20
125	女騎士エルザ フランス現代小説	ピエール・マッコルラン、永田逸郎訳	第一書房	1936(S11).7.20
126	戦国合戦記 日本歴史物語全集 6	菊池寛	新日本社	1936(S11).7.25
127	反逆児 フランス現代小説	ジャック・ド・ラクルテル、青柳瑞穂訳	第一書房	1936(S11).8.20
128	熱風・哀恋散華 新鋭大衆小説全集 4	中野実	アトリエ社	1936(S11).8.25
129	春の行列 純粹小説全集 1 2	岡田三郎	有光社	1936(S11).9.5
130	菊池寛集 決定版現代日本小説全集 1	菊池寛	アトリエ社	1936(S11).9.20
131	野槿の百 股旅小説全集 9	吉川英治	新小説社	1936(S11).9.25
132	衣裳花嫁 純粹小説全集 2	林房雄	有光社	1936(S11).10.17
133	プランジェ將軍の悲劇	大仏次郎	改造社	1936(S11).10.17
134	いのちの初夜	北条民雄	創元社	1936(S11).12.3
	1937 (昭和 12) 年			
135	若い人	石坂洋次郎	改造社	1937(S12).2.20
136	さらば花の家よ・居留地の丘 新鋭大衆小説全集 1 1	北林透馬	アトリエ社	1937(S12).3.15
137	柳桜集 木々高太郎探偵小説集	木々高太郎	版画荘	1937(S12).3.20
138	暢気眼鏡 (第一小説集叢書)	尾崎一雄	砂子屋書房	1937(S12).4.1 普及版 同 8.22
139	白井喬二集 決定版現代日本小説全集 7	白井喬二	アトリエ社	1937(S12).4.15
140	秋箋	芹沢光治良	竹村書房	1937(S12).6.20
141	桜並木の一本の桜・蝸牛の足 新鋭大衆小説全集 1 4	木々高太郎	アトリエ社	1937(S12).6.20
142	鳴平旅ごろも・松葉かんざし 新鋭大衆小説全集 1 6	池善一	アトリエ社	1937(S12).8.20
143	二人で見た夢 新作ユーモア全集 5	中村正常	春陽堂書店	1937(S12).9.5
144	鎌倉夫人	深田久弥	改造社	1937(S12).10.20
145	日蔭の村 (新選純文学叢書)	石川達三	新潮社	1937(S12).10.22
146	軍用鼠	海野十三	古今荘書房	1937(S12).11.10
147	長篇小説 薔薇合戦 上巻	丹羽文雄	竹村書房	1937(S12).11.20
148	牝豹	岸田国土	三笠書房	1937(S12).12.7
149	続若い人	石坂洋次郎	改造社	1937(S12).12.13
150	恋愛綱領 書き下ろし長篇小説叢書 6	立野信之	河出書房	1937(S12).12.17

1938 (昭和 13) 年				
151	イヴと蛇の恋 新作ユーモア全集 8	岡成志	春陽堂書店	1938(S13).1.10
152	爆撃鑑査写真七号	小栗虫太郎	不尽書院	1938(S13).1.20
153	嵐に生れ出づるもの	オストロフスキイ、稲田定雄訳	第一書房	1938(S13).1.28
154	新悪童物語	ルウドキヒ・トオマ、実吉捷郎訳	白水社	1938(S13).3.5
155	五人の機銃兵	A. U. マアス、伊東鋭太郎訳	春秋社	1938(S13).3.10
156	軍事小説 上海陸戦隊	福永恭助	第一書房	1938(S13).3.20
157	敗走千里	陳登元、別院一郎訳	教材社	1938(S13).3.20
158	国際スパイ戦秘話	H. C. バイウォーター、荒川実蔵訳	大東出版社	1938(S13).3.30
159	長篇 北京	阿部知二	第一書房	1938(S13).4.20
160	風と共に去りぬ 下巻	M. ミッチェル、大久保康雄訳	三笠書房	1938(S13).5.15
161	倅太平記 新作ユーモア全集 14	乾信一郎	春陽堂書店	1938(S13).5.18
162	書き下ろし長篇 青春	伊藤整	河出書房	1938(S13).5.22
163	続生活の探究 書下ろし長篇小説叢書 14	島木健作	河出書房	1938(S13).6.17
164	酒場 (バー) ルーレット紛擾記 (トラブル)	橘外男	春秋社	1938(S13).7.31
165	ナリン殿下への回想	橘外男	春秋社	1938(S13).8.20
166	北ホテル	ユージェヌ・ダビ、岩田豊雄訳	白水社	1938(S13).9.1
167	義歯の行列 新作ユーモア全集 16	伊馬鶴平	春陽堂書店	1938(S13).9.20
168	或る男の死	ジュウル・ロマン、山内義雄訳	白水社	1938(S13).9.30
169	長篇小説 人間	前田河広一郎	六芸社	1938(S13).10.21
170	日本小説代表作全集 1 昭和十三年・前半期	川端康成・武田麟太郎・間宮茂輔編	小山書店	1938(S13).10.31
171	秘密の上海	ジャン・フォントノア、市木亮訳	教材社	1938(S13).11.5
172	積雪	滝井孝作	改造社	1938(S13).12.18
1939 (昭和 14) 年				
173	脇坂部隊	中山正男	陸軍画報社	1939(S14).1.1
174	怒涛 生活文学選集 1	間宮茂輔	春陽堂書店	1939(S14).1.18
175	馬 (新選純文学叢書)	伊藤永之介	新潮社	1939(S14).1.29
176	文学部隊	尾崎士郎	新潮社	1939(S14).3.21
177	両国棍之助	鈴木彦次郎	新潮社	1939(S14).4.30

178	戦場の乙女	マリーナ・ユロア、本間立也訳	改造社	1939(S14).5.19
179	小説集 丸の内草話	岡本かの子	青年書房	1939(S14).5.20
180	姫鱈 第一小説集叢書	長見義三	砂子屋書房	1939(S14).6.1
181	名作探偵 名探偵	ガボリオー、田中早苗訳	博文館	1939(S14).6.8
182	春の嵐 (ゲルトルート)	ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳	新潮社	1939(S14).6.8
183	万引一代女 諷刺ユーモア小説集	辰野九紫	代々木書房	1939(S14).6.10
184	一万円使ふ話 諷刺ユーモア小説集	岡成志	代々木書房	1939(S14).6.10
185	チロル短篇集	浜野修編	改造社	1939(S14).6.16
186	北原武夫小説集 妻	北原武夫	春陽堂書店	1939(S14).6.17
187	山の仲間	千坂正郎	朋文堂	1939(S14).6.20
188	現代の英雄	間宮茂輔	新潮社	1939(S14).6.22
189	孤児ネルリ	ドストエフスキ原作、オレスト・ミルレル編、伊東鏡太郎訳	日本公論社	1939(S14).9.25
190	悲劇喜劇 (新選純文学叢書)	丸岡明	新潮社	1939(S14).10.18
191	オロシヤ船 新選名作叢書	井伏鱒二	金星堂	1939(S14).10.20
192	恋の手紙	宇野千代	中央公論社	1939(S14).11.15
193	日本小説代表作全集 3 昭和十四年・前半期	川端康成・武田麟太郎・間宮茂輔編	小山書店	1939(S14).11.15
194	石川達三読物集 若き日の倫理	石川達三	実業之日本社	1939(S14).12.10
195	アントニイ・アドヴァース (第一卷) 現代アメリカ小説全集 13	ハーヴェイ・アレン、大久保康雄訳	三笠書房	1939(S14).12.10
196	青麦	広津和郎	学芸社	1939(S14).12.20
1940 (昭和 15) 年				
197	アメリカの悲劇 上巻 現代アメリカ小説全集 2	シオドア・ドライザ、田中純訳	三笠書房	1940(S15).1.20
198	春のない谷間	ロマン・ルウセル、新庄嘉章訳	実業之日本社	1940(S15).1.27
199	チビの魂 文化叢書 7	徳田秋声	青木書店	1940(S15).2.5
200	女兵 (ニューイビン)	謝冰瑩、中山樵夫訳	三省堂	1940(S15).2.20
201	小説 転落の詩集	石川達三	新潮社	1940(S15).2.20
202	恋人海を渡る ユーモア長篇小説集	P.G ウッドハウス、岡成志訳	東成社	1940(S15).3.20
203	白蘭の歌	久米正雄	新潮社	1940(S15).3.21
204	火の赤十字	松坂忠則	弘文堂書房	1940(S15).3.30
205	汽車の罐焚き	中野重治	小山書店	1940(S15).4.15
206	巢燕 (そうえん)	矢田津世子	白水社	1940(S15).6.10
207	日本小説代表作全集 4 昭和十四年・後半期	川端康成・武田麟太郎・間宮茂輔編	小山書店	1940(S15).6.20

208	アメリカの悲劇 下巻 現代アメリカ小説全集3	シオドア・ドライザ、田中純訳	三笠書房	1940(S15).6.28
209	長篇小説 泉	岸田国土	朝日新聞社	1940(S15).8.10
210	ねずみ娘 ユーモア文庫	宇井無愁	東成社	1940(S15).8.20
211	日本小説代表作全集5 昭和十五年・前半期	川端康成・武田麟太郎・間宮茂輔編	小山書店	1940(S15).11.25
212	葡萄の岸 林芙美子短篇集下巻	林芙美子	実業之日本社	1940(S15).11.26
213	印度の放浪児	キップリング、宮西豊逸訳	大元社	1940(S15).12.20
214	暁の合唱 前編	石坂洋次郎	新潮社	1940(S15).12.20
	1941 (昭和16) 年			
215	使徒行伝	石川達三	新潮社	1941(S16).3.31
216	たをやめ	阿部知二	新潮社	1941(S16).4.27
217	人形佐七捕物帳 読切 三巻	横溝正史	春陽堂書店	1941(S16).6.5
218	名作小説 乃木將軍	木村毅	博文館	1941(S16).6.15
219	神変稲妻車	横溝正史	春陽堂書店	1941(S16).7.1
220	梟 有光名作選集3	伊藤永之介	有光社	1941(S16).7.15
221	香港	中野実	蒼生社	1941(S16).7.17
222	長篇小説 美しき地図	火野葦平	改造社	1941(S16).8.7
223	楠正成	佐藤一英	教材社	1941(S16).8.10
224	南海游侠伝 日柳燕石波瀾の生涯	木村毅	拓南社	1941(S16).9.15
225	樹海 現代アメリカ小説全集5	コンラッド・リクター、植草甚一訳	三笠書房	1941(S16).10.19
	1942 (昭和17) 年			
226	白い壁画	富沢有為男	小学館	1942(S17).1.30
227	勤王届出	丹羽文雄	大観堂	1942(S17).3.20
228	ノモンハン空中実戦記 撃墜	松村黄次郎	教学社	1942(S17).3.25
229	駐日Z大使館 国防文芸叢書	古川真治	成武堂	1942(S17).7.25
230	千利休	井上友一郎	大観堂	1942(S17).10.28
231	青春の花道	伊藤松雄	奥川書房	1942(S17).12.20
	1943 (昭和18) 年			
232	海底トンネル	寺島樞史	東水社	1943(S18).1.20
233	熱線博士	蘭郁二郎	新正堂	1943(S18).3.20
234	火の柱 勝利の巻	中村武羅夫	甲子社書房	1943(S18).9.10
235	秋の歌	今日出海	三香書院	1943(S18).12.20
	1944 (昭和19) 年			
236	御神火	井伏鱒二	甲鳥書林	1944(S19).3.30
237	婦道太平記 上巻	村松梢風	万里閣	1944(S19).5.18
238	婦道太平記 下巻	村松梢風	万里閣	1944(S19).8.20
239	白い戦争	秦賢助	鶴書房	1944(S19).9.10
	1945 (昭和20) 年			
240	悉皆屋康吉	舟橋聖一	創元社	1945(S20).12.25

3 選ばれた図書と読まれた図書

当時宝塚文芸図書館が所蔵し、一般の人々に利用された図書の全体からすれば、調査できた本は、そのごく一部にすぎない。『月報』第15号（昭和12（1937）年9月）によれば、この年の8月末での蔵書総数は20,283点、そのうち文学の部が4,100点、小説の部が2,574点とあり、合計6,674点であった。『月報』第62号（昭和16（1941）年7月）には、この年の4月現在の蔵書総数は25,313点で、文学・語学の部門として、7,664点となっている。分類の仕方が異なるので、明確な数字は出てこないが、宝塚文芸図書館には3,000点から4,000点程度の小説類があったと考えられる。今回の調査では240点を調査したので、当時所蔵されていた小説類の十数冊に1冊程度を調査したことになるだろう。

まず、調査した本の点数を、その本の初版の発行年で区分して示してみよう。

1926（昭和1）年6点、	1927（昭和2）年3点、	
1928（昭和3）年8点、	1929（昭和4）年15点、	
1930（昭和5）年21点、	1931（昭和6）年25点、	
1932（昭和7）年11点、	1933（昭和8）年7点、	
1934（昭和9）年15点、	1935（昭和10）年6点、	
1936（昭和11）年17点、	1937（昭和12）年16点、	
1938（昭和13）年22点、	1939（昭和14）年24点、	
1940（昭和15）年18点、	1941（昭和16）年11点、	
1942（昭和17）年6点、	1943（昭和18）年4点、	
1944（昭和19）年4点、	1945（昭和20）年1点、	計240点

本の初版発行の日付と、それが図書として受け入れられ、利用に供された日付との間には、一定の時間を想定する必要があるが、『月報』に掲載されている「増加図書目録」と見比べてみると、その間隔は大きくはなかったと考えられる。図書館の開館は昭和7（1932）年であるので、調査した図書には、それ以前の新温泉内の「図書室」の時代からのものも含まれているが、改築の計画が発案されたのは大正末年であり、昭和1年（1926）から6（1931）年までの

もの、とりわけ5（1930）年や6（1931）年のものなどは、発足の準備として受け入れられたものであろう。数字が館の発足後に減少し、11（1936）年あたりから再び増えて、13（1938）年・14（1939）年にピークを迎えるのは、第1章で見た、11（1936）年からの入館の無料化と利用者の増大という動向と符合している。上記の数字が示すようなカーブを描いて、宝塚文芸図書館は発展し、17（1942）年以降は、戦争の進行とともに沈滞していったのだろう。

さて、これらの一群の本の特徴として、いわゆる純文学作品は少数派で、むしろ通俗小説の類が多いことが挙げられる。作家としては大仏次郎と吉川英治がもっとも多く6点、石川達三、広津和郎がそれに次ぎ5点である。調査した240点の中に、2点以上著書のある作家の名と、その書名とを列記してみよう。

- 6点・大仏次郎 『春宵和尚奇縁』『からす組』『ドレフュス事件』『白い姉』『大楠公』『ブランジェ將軍の悲劇』
- ・吉川英治 『江戸三国志 前篇』『同 中篇』『江戸城心中』『松山兄弟 上巻』『同 下巻』『野槌の百』
- 5点・石川達三 『蒼氓』『日蔭の村』『若き日の倫理』『転落の詩集』『使徒行伝』
- ・広津和郎 『女給君代』『過去』『風雨強かるべし』『青春行路』『青麦』
- 4点・井伏鱒二 『なつかしき現実』『逃亡記』『オロシヤ船』『御神火』
- ・直木三十五 『南国太平記 前篇』『同 中篇』『楠木正成』『明暗三世相』
- 3点・石坂洋次郎 『若い人』『続若い人』『暁の合唱 前編』
- ・大下宇陀児 『日本探偵小説全集9』『金色藻・街の毒草』『狂樂師』
- ・岡成志 『女心風景』『イヴと蛇の恋』『一万円使う話』
- ・十一谷義三郎 『笑ふ男・笑ふ女』『神風連 上巻』『同 下巻』
- ・村松梢風 『男装の麗人』『婦道太平記 上巻』『同 下巻』
- ・横溝正史 『埴侯爵一家』『人形佐七捕物帳 三巻』『神変稲妻車』
- ・ドライサー 『亜米利加の悲劇（上巻）』『アメリカの悲劇 上巻』『同 下巻』
- 2点・阿部知二 『北京』『たをやめ』
- ・伊藤永之介 『馬』『梟』
- ・伊藤痴遊 『快傑伝』『政界疑獄実話』
- ・宇野千代 『あひびき』『恋の手紙』
- ・江戸川乱歩 『闇に蠢く』『江戸川乱歩全集4』
- ・岡本綺堂 『青蛙堂鬼談』『両国の秋』

- ・木々高太郎 『桜柳集』『桜並木の一本の桜・蝸牛の足』
- ・菊池寛 『戦国合戦記』『決定版現代日本小説全集 1』
- ・岸田国土 『牝豹』『泉』
- ・木村毅 『乃木將軍』『南海遊俠伝』
- ・久米正雄 『金環蝕』『白蘭の歌』
- ・甲賀三郎 『恐ろしき凝視』『死化粧する女』
- ・橋外男 『酒場ルーレット紛擾記』『ナリン殿下への回想』
- ・立野信之 『軍隊病』『恋愛綱領』
- ・中野実 『熱風・哀恋散華』『香港』
- ・丹羽文雄 『薔薇合戦 上巻』『勤王屈出』
- ・林芙美子 『野麦の唄』『葡萄の岸』
- ・細田民樹 『生活線 ABC』『新選大衆小説全集 14』
- ・間宮茂輔 『怒涛』『現代の英雄』
- ・三上於菟吉 『日輪 前編』『彼女の太陽・焔の歌・血闘』
- ・横光利一 『高架線』『雅歌』
- ・ヴァン・ダイン 『ケンネル殺人事件』『賭博場（カジノ）殺人事件』
- ・モーパッサン 『戦争小説集・惨虐小説集』『中篇小説集』

いかにもよく読まれていて当然と頷ける作家たちの名前が並んでくるが、いわゆる純文学も通俗小説も外国文学も探偵小説も同列に並んでくることに改めて驚かされる。逆に並んでいない名前を考えてみると、明治や大正の作家たちの名前がないことに気づく。公共図書館の文芸書のリストとして、また、公共図書館でよく読まれた小説のリストとして、漱石や鴎外の挙がってこないリストや、ゲーテやトルストイの挙がってこないリストは珍しいのではないだろうか。ここまで当代の流行作家だけを並べたリストが、公共図書館においてよく読まれた本のリストであるということに、違和感はないだろうか。この偏った傾向は、『月報』の「増加図書目録」を見ても同じで、この館の選書方針であったことが確認される。

先に見た『図書館研究』に、田村盛一^(註8)の「通俗図書館ニ於ケル図書選法」という論文がある（第3巻第3号、昭和5（1930）.7）。そこで、「小説類」の選書については、次のように述べられている。

出版図書数カラ見テモ、閲覧者ノ需要ノ点カラ見テモ小説類ハ常ニ多イモノデア
ル。従ッテコレヲ如何ニ選択スルカトイフコトハ、図書選択上カラバカリデナク、ソ
ノ館ノ経営上カラモ重大ナ意味ヲ持ツモノデ、(中略)ソレニシテモ、アノ多数ノ出
版ト、社会万般ノ事象乃至人生観上ノ種々相ヲ描出シテ多感ナ青年子女ヲ感動セシメ
魅惑スルノ力ヲ有スルコトヲ思フ時、ソノ選択ニ厳密ヲ要スルトイフコトハ否メナイ。

田村は、「小説類」の「多感ナ青年子女ヲ感動セシメ魅惑スルノ力」を、魅
力的であるがゆえに危険でもあり、公共図書館にとってはいわば諸刃の剣で
あって、「選択ニ厳密ヲ要スル」と言う。昭和前期の公共図書館の、また社会
全体の「小説類」に対する警戒心は、現代よりはるかに強い。それだけ、公共
図書館の教育的な使命が高く捉えられていたのであり、上からの押しつけにな
りかねない危険性を持ちながらも、社会教育事業としての理想が追求されてい
たといえる。「閲覧者ノ需要」の高い「小説類」を多く備え付けて「館ノ経営」
の利を図るか、それを制限して社会教育の使命を厳しく実践するかは、理念と
現実を天秤に掛けた二者択一であり、私立の公共図書館にあっては、公益と私
益のどちらを優先させるかという分岐点であったともいえる。

田村は、さらに「備付」についての基準を、より具体的に示している。

- (1) 備付ケルヲ可トスル小説
 1. 文芸史上著名ナモノ
 2. 著名ナル作家ノ代表的ノモノ
 3. 社会的ニ定評ヲ得タルモノ
 4. 明快ナル文章ニテ書カレタ正純ナ内容ノモノ
 5. 興味本位ノ無邪気ナモノ
 6. 歴史上ノ事件ヤ人物ヲ描ケル真面目ナモノ
- (2) 備付ケテ避ケルヲ可トスル小説
 1. 極端ニ主義ノ宣伝又ハ傾向ノ主張ニ重キヲ置ケルモノ
 2. 社会風教ニ害アルモノ
 3. 挑発的デ野卑ナモノ
 4. 非倫理的デ惨忍ナモノ

5. 厭世的ナモノ
 6. 創作的価値ナキモノ
 7. 人格的ニ非難多キ作家ノモノ
- (3) 備付ケヲ見合スベキ小説
1. 評価定マラザル新作
 2. 著名ナラザル作家ノモノ

この選書基準と比べてみれば、調査した図書からうかがえる宝塚文芸図書館の選書の傾向は特殊である。今回は実際に受け入れられた図書の調査が十分できておらず、その比較が必要だが、よく読まれて傷んだ図書は、「文芸史上著名ナモノ」「社会的ニ定評ヲ得タルモノ」ではなく、「評価定マラザル新作」であり、「挑発的デ野卑ナモノ」「非倫理的デ惨忍ナモノ」と見なされかねないものも少なくない。翻訳小説にしても、アメリカやフランスの最新の作品が受け入れられており、ドライサーが1925年に発表した『アメリカの悲劇』は、昭和5(1930)年の翻訳と昭和15(1940)年の翻訳とが重ねて受け入れられている。図書館からは次第に締め出される、プロレタリア文学やその系列の作家の作品も数は少ないが含まれている。

『月報』第22号(昭和13(1938)年4月)の巻頭言「図書館と出版屋」には、この館の選書方針が述べられている。

毎月図書館で図書を購入する方針は①有益なる図書、②有用なる図書、③興味ある図書等である、その内でも図書館で最もよく希望するのは①及び②である、従つて文部省の推薦図書、日本図書館協会等にて挙げられる優良図書は多く①の部類即ち有益なる図書のみである。(中略)所が如何にせん図書館で一般によく読まれる図書は斯かる有益なる図書にあらずして、③興味ある図書によつて多数占められつゝある現象は図書館では未だ個人の嗜好を支配する力が無いからである、(中略)読書にも種々な相がある、純粹に學術研究の爲にするのもあれば、修養の爲にするのもある、興味本位の読書もあれば実用本位の読書もある、慰安、娛樂乃至退屈のきの読書も自からこの範囲に入る、これら各種各様の読書欲を満足せしむる所に図書館の存在理由があるのである。

文脈はかなりゆれ動きながらも、ここでは、その選書に関して、「各種各様の読書欲を満足せしむる所に図書館の存在理由がある」という立場が表明されている。また、『月報』第24号（昭和13（1938）年6月）の巻頭言「宝塚文芸図書館の旗幟」には、次のようにある。

当館は有名なる歓楽境である宝塚新温泉の一設備として発達し来り、閲覧者の大部分は当地の遊覧者を以て占められておる、単にそれだけを目的としたものなら、所謂雑誌の閲覧所か、それとももう少し気のきいた新刊図書 of 閲覧所程度のもので事は足りる、実際にまた当館はその目的にも添つてもおるが、殊更に文芸図書館を称しておる所以は他に主要なる事業を兼ね行つておるからである。演劇・映画・舞踊・その他及びそれに関連した図書を蒐蔵して日本演劇界の為に貢献する所あらん事を期待して只竟精進しておる。

どちらの文章からも、奥歯にももののはさまったような口吻、もどかしげな顔つきが感じ取られ、戸沢や館員たちがこの選書方針に十分満足してはいなかったことがうかがえる。公共図書館の図書館員としての理念と、「有名なる歓楽境である宝塚新温泉の一設備」であることが要求する現実的な対応との亀裂を、彼らは苦々しく受け入れていたのであろう。しかし、このような来館者たちの〈俗〉に合わせた選書が行われたからこそ、来館者たちは望む本を読むことができたのである。当時の公共図書館の常識から外れていることで、かえって、宝塚文芸図書館は、社会教育と称しての上からの押しつけを免れていたともいえる。自分たちの持つ高い理想を封じて、反応してくる遊興の客たちの要求に応えたことで、人気のある図書館が現出し、表紙が破れるほど読まれた本が残ったのである。

調査した240点の修理された姿、傷んだ姿を見ていると、当時の来館者の思いが想像されてくる。直木三十五の『南国太平記』は、2冊ともほろほろになっている。広津和郎や石川達三の本もよく読まれている。久米正雄の2冊は、恋愛小説である『金環蝕』はよく読まれているが、従軍報告といえる『白蘭の唄』は、表紙がきれいで、あまり読まれていない。立野信之の『軍隊病』や岩藤雪

夫の『賃銀奴隷宣言』など、プロレタリア文学系の本も、既に閲覧に制限があったのかもしれないが、あまり読まれていない。

これらの一群の本は、当時の小説類の出版状況を反映して、叢書が多数を占めている。その叢書名を挙げていけば、見てきた傾向は一層明瞭になるだろう。以下に、複数の点数が挙がる叢書名を列記する。

[まず、点数と叢書名を記し、() 内に出版社と総巻数、そして第一回配本の年を記入した。その後、『日本近代文学大事典』第六巻(日本近代文学館編、1978.3、講談社)の「叢書・文学全集・合著集総覧」に細目のあるものについては「*近代」と記し、『現代日本文学総覧シリーズ1 全集・内容総覧 上』(1982.6、日外アソシエーツ)に細目のあるものについては、「*総覧」と記した。各項の下段には、存在する巻の著者名もしくは巻名を示した。]

- 5点 ・「日本探偵小説全集」(改造社、20巻、1929年) *近代・*総覧
角田喜久雄、夢野久作、山下利三郎・川田功、大下宇陀児、保篠竜緒、
- 4点 ・「文芸復興叢書」(改造社、24巻、1934年) *近代
井伏鱒二、宇野浩二、武田麟太郎、竜胆寺雄
・「新鋭大衆小説全集」(アトリエ社、16巻、1936年)
池善一、木々高太郎、北林透馬、中野実、
・「新作ユーモア全集」(春陽堂書店、16巻、1937年)
伊馬鶴平、乾信一郎、岡成志、中村正常、
・「日本小説代表作全集」(小山書店、13巻、1938年) *近代
昭和13年前半期、昭和14年前半期、昭和14年後半期、昭和15年前半期、
・「現代アメリカ小説全集」(三笠書房、16巻、1939年)
コンラッド・リクター、シオドア・ドライサー(2)、ハーヴェイ・アレン、
- 3点 ・「現代ユウモア全集」(現代ユウモア全集刊行会、24巻、1927年) *総覧
大泉黒石、佐々木味津三、牧逸馬、
・「新でかめろん叢書」(四六書院、6巻、1931年)
石川欣一、松本泰、森岩雄、
・「フランス現代小説」(第一書房、10巻、1931年)
アンリ・ド・モンテルラン、ジャック・ド・ラクルテル、ピエール・マッコラン、
・「書き下ろし長篇小説叢書」(河出書房、35巻、1937年) *近代
伊藤整、島木健作、立野信之、
・「新選純文学叢書」(新潮社、19巻、1937年) *近代
石川達三、伊藤永之介、丸岡明、

- 2点 ・「創作探偵小説集」(春陽堂、7巻、1925年)
 甲賀三郎、小酒井不木、
 ・「大衆文学集」(新潮社、4巻、1928年) *近代
 昭和四年版、昭和六年版、
 ・「令女文学全集」(平凡社、15巻、1929年) *綜覧
 加藤まさを、水谷まさる、
 ・「新興芸術派叢書」(新潮社、24巻、1930年) *近代
 浅原六朗、横光利一、
 ・「アメリカ尖端文学叢書」(新潮社、3巻、1930年) *近代
 ハーゲスハイマー、尖端短篇集、
 ・「新選大衆小説全集」(非凡閣、24巻、1933年) *綜覧
 長谷川伸、細田民樹、
 ・「モーパッサン傑作短篇集」(河出書房、6巻、1935年)
 戦争小説集・惨虐小説集、中篇小説集、
 ・「第一小説集叢書」(砂子屋書房、19巻、1936年) *近代
 尾崎一雄、長見義三、
 ・「純粹小説全集」(有光社、13巻、1936年) *近代・*綜覧
 岡田三郎、林房雄、
 ・「決定版 現代日本小説全集」(アトリエ社、11巻、1936年)
 菊池寛、白井喬二、
 ・「諷刺ユーモア小説集」(代々木書房、巻数未詳、1939年カ)
 岡成志、辰野九紫、

一貫してよく読まれているのは、まず時代小説の叢書であり、時代小説・歴史小説の類は、叢書・単行本の別なく、傷んでいる本・再製本されている本が多い。探偵小説の類も、全般的によく読まれている。恋愛小説を含む通俗小説の叢書も同様で、叢書・単行本の別なく、よく読まれている。ユーモア小説には、読まれているものとそうでないものとの差がある。翻訳小説も同様である。純文学では、「文芸復興叢書」がどれもよく読まれている。「純粹小説全集」はよく読まれているが、「第一小説集叢書」には読まれているものとそうでないものがあり、「日本小説代表作全集」は全般的によく読まれている。

宝塚文芸図書館は、その活動期(昭和7(1932)年～昭和24(1949)年)に

において、多くの宝塚新温泉の客たちと、やや少数の一般の来館者を迎え、娯楽に重心をおいた図書を利用に供し、多数の利用者を獲得した。公共図書館が教育的な使命感を持ち、それゆえに、多くがその枠組みに縛られる中で、宝塚文芸図書館は、やや不本意ながらも娯楽としての読書に門戸を開いた。そのことは、当時は、外の〈俗〉への迎合と見られたであろうが、見方を変えれば、現代を先取りした、もっとも先鋭的な図書館であったといえるのではないだろうか。

4 〈通俗性〉という問題

前田愛は、円本合戦の後に大量に出現した〈読者〉の問題を指摘し、次のように述べている。

円本が投げかけた問題の核心は、高島や青野の指摘した出版の資本主義化もさることながら、その結果として顕在化した歴大な享受者層そのものの中にあった。すでに講談社の「キング」は大正十四年一月の創刊号で七十万部を越える発行部数を記録し、新潮社の「世界文学全集」は五十八万の予約読者を獲得する。改造社の広告が「民衆」というシンボルを執拗に繰り返した事実が端的に示しているように、出版機構の自由に操作しうる《大衆》が登場したのである。それは円本によって、また講談社文化によって「啓蒙」されようとしている《大衆》である。（「昭和初期の読者意識—芸術大衆化論の周辺—」『近代読者の成立』（有精堂、1973.11）所収）

この「顕在化した歴大な享受者層」に直面した、当時の文学者のなまの声として、窪川鶴次郎の文章を引いておきたい。

一体私たちは読者の問題をどうしたらいいといふのか。

小説の流行に対する疑問は、純文学が、その流行にも拘らず、読者を把へてゐない証拠である。把へてゐるならば小説の流行に対する疑問が、そんなに簡単に起つてくる筈がない。つまり純文学は読者を把へる方法を持つてゐなかつたのである。（中略）私たちは、既に述べたやうに一方では、今日の文学の実体を把へてゐない。他方では、読者を把へた意味を文学の外にはなく、文学の中に把へることが出来な

いでゐる。これら二つの事実は、文学が自らを發展せしめようとする自主的意識を失つてゐることを語つてゐる。といふよりも、即ち文学の發展し変化し推移してゆく状態に就いての意識を自主的に持つことが出来ないことを語つてゐる。私たちが、小説の流行に対する疑問といふ形で、もう一と皮剥けば純文学に対する疑惑といふ心理で告白してゐる私たちの不安は、このやうな客觀的事実から來てゐるのである。(「序に代へて 人間に還れ」『現代文学論』(昭和14(1939)年11月、中央公論社)所収)

小説が流行しているということは、自分たち作家の営為が高く評価されることになるはずである。しかし、「純文学」は「読者を把へてゐない」。読者を「把へてゐる」のは、何か別のものであり、この状態では、「文学の發展し変化し推移してゆく状態に就いての意識を自主的に持つことが出来ない」と、窪川は言う。そこには、円本の時代によって、突然、地面が隆起するようにして出現した「龐大な享受者層」に対する、率直なとまどいが見える。「小説の流行」は、「文学の中」の力が導いたものではなく、その得体の知れない流行を前にして、彼は「自主的意識」の位置を見失う。

円本に名を連ねて、その本が何十万部もの発行部数・購読部数に達したとき、それが自分の作品の読者であると思ひ込んだ作家たちも、次第にそうではないことに気づく。大正時代の数千部単位の文芸書の読者は、確かに自分の本を選んで読んでくれていた。しかし、円本が登場させた読者は、時代の変化と出版社の広告に応じて出現した読者であつて、自分の作品の価値や魅力が引き寄せたものではない。いままでの可視的な読者とは異なる、何か不可視な〈読者〉である。そう気づいて、作家たちは次第に「不安」に駆られる。

窪川は、この〈読者〉に対する自分たちの位置を探ろうとしていく。

自然主義文学は、山間僻村の埋れた生活を描いた多くの作品を残してゐる。(中略) 例えば田山花袋は『田舎教師』の中に日露戦争の凱歌を病床に聞きつゝ、青春の希望にあがき苦しんだ果てに死んでいつた上州地方の一小学校教師の運命を詳細に辿つた。島崎藤村氏が、『千曲川のスケッチ』において徐々に農村の暗い家の中に目を向けて行つた推移は、何人の目にも鮮やかであらう。(中略) かやうにして自然主義作家たちは、そこに人生の意義と現実の真相を在るがまゝの生活の中に探らうとし

た。そのリアリスティックな態度は描かれた世界の真実に近づき、深く掘り下げてゆくことを可能ならしめた。それにも拘はらず、自然主義作家たちは読者の問題を提起することは出来なかつた。自然主義作家たちは彼らの描いたかゝる世界を生活してゐる人々を自己の読者として、この読者に対する責任を自己の文学に課し、自己の文学を読者大衆の生活の代弁者たらしめようとはしなかつた。何となればこれら作家の人生観や世界観は、上記の如き生活が要求している解決の方向とは別個のものであつたから。その生活は一方的に作家達自身の人生にとつて必要な対象だつたのに過ぎない。〔現代の創作方法』『現代文学論』（同前）所収〕

〈読者〉とは、都市や地方の民衆を指すはずである。「自然主義作家たち」は、民衆を主人公としつつ、その民衆に作品が読まれることに無関心であつた。「上州地方の一小学校教師の運命」に注目したといつても、「農村の暗い家の中に目を向けて行つた」といつても、それは、その作家が、自身の問題の解決の場として必要としていたにすぎない。「民衆」は、その作家が捉え、内部に取り込んだものでしかなく、いわばヴァーチャルなものであつて、作家が、現実の民衆に直接向き合っているわけではなく、民衆と作家とが問題や解決を共有しているわけでもない。作品は、あくまでも、作家の内部で始まり、内部で完結する。それが、「近代」の文学であつた。

この「自然主義作家たち」の限界の指摘は正当であるが、それはそのまま窪川自身にも返ってくる。当時の文学におけるさまざまな流派において、何を提供するかという内容に相違はあつても、作家たちが自分の内部で形成した「人生観や世界観」を読者に押しつけていることに変わりはなかつた。

これに対して、昭和前期に唐突に出現する数十万という〈読者〉は、勝手気ままに読みたいものを読み、評価基準の明確でない、また流行に影響されやすい選択を、作家たちに突きつけてくる。そして、作家たちは、その選択に無関心ではいられなくなる。それまでは単なる受け手でしなかつた〈読者〉が、存在を主張しはじめ、作家たちとの新しい関係を迫ってくる。作家たちは、〈読者〉という外部に、はじめて直面したといえる。

ところが、窪川は、その〈読者〉に近づいていくことができない。

作家は常に、己れの欲するところに従つてのみ描くことが出来る。作家は何を描かうと自由である。今日、読者、民衆の問題を論議する人々は、対象についてのこの芸術家本来の自由を、放棄しようとするのであらうか。放棄しても構はないといふのであらうか。この芸術的自由なくして芸術はあり得ない。私たちは今日こそますますこの芸術的自由を欲求し、守らねばならぬ必要にせまられてゐる。

然しそれと同時に文学が、読者、民衆と真実に結びつかんがためには、かゝる自由の創造が如何なる読者、民衆の生活を対象としたものであるかを検討しなければならぬ。私たちは芸術の対象についての自由を主張すると同時に、自己の創作方法に対するこの省察をせまられてゐる。(同前)

彼の主張する「芸術の対象についての自由」は、作者の内部の世界を守るためのものであり、特にこの時代には、国家権力による侵害を防ぐためのものでもあった。しかし、国家権力とともに〈読者〉をも遮断し、考察を「自己の創作方法に対する」ものに転換していくとき、彼は、新しく現われた〈読者〉の実体から目をそらしてしまう。「芸術的自由」を失うことは体制への迎合であり、「通俗化」という墮落であるという固定観念から、彼は離れられない。

一体通俗性とは何であるか。

それは単に文学的現象としての、低俗な興味や、好奇心の誘発や、俗悪な趣味や、荒唐無稽な筋の組立てやなどではない。かゝる文学的現象を支配する根本的な精神があつてのかゝる現象なのである。従つてその根本的精神を見ない、皮相の、芸術的、非芸術的の差別づけは何等問題の本質を衝き得てゐないのである。要するに通俗性は、現実の社会の、支配的イデオロギイの産物としての、一切の現象の無条件的容認にある。(「最近の文学意識の諸現象」『現代文学論』(同前)所収)

社会の現実を無批判に容認してしまう怠慢が、通俗的な「精神」と呼ばれる。現実社会を批判するプロレタリア文学の「目的意識」の高さが、〈読者〉という外部を遠ざける。第1章で見た、図書館員たちの高い理念と、応じる現実の来館者たちの〈俗〉とのへだたりは、窪川と〈読者〉のへだたりでもある。

ところで、公共図書館は、もと「通俗図書館」と呼ばれていた。社会教育の

意味の「通俗教育」という用語が、文部行政において明治19（1886）年から大正10（1921）年まで使われたのに合わせて、「通俗図書館」の用語があった。

通俗図書館は、資料（通俗図書）の提供の面からは、民衆一般にとって簡便で貸出しに重きをおくという性格を持ったものであると見られる一方、図書の内容が国によって厳しく規制されたという特徴を持っていた。そしてこの点が結局教化機関としての機能の方を重視することにつながっていったといえる。

（『最新 図書館用語大辞典』、図書館用語辞典編集委員会編、2004.4、柏書房）

文部行政の用語としての「通俗」に、民衆を低く見る、上からの管理的発想があるように、窪川の言う「通俗化」にも民衆を見おろす視点が付随している。理念の高さが作り出す現実の〈読者〉とのへだたりは、遠近の距離ではなく、上下の落差になるからである。〈作者〉と〈読者〉は、同じ地平で作品を共有してはいない。しかし、〈読者〉への接近が迎合であり、「通俗化」であるとするれば、「不安」や「純文学に対する疑惑」を解消するためには、どうすればよかったのだろうか。

〈通俗性〉というものを、内容の問題でも精神の問題でもなく、関係の問題と考えればどうだろうか。宝塚文芸図書館が通俗小説を受け入れ、来館者との間に、他の公共図書館と異なる関係を結んだように、作家たちが〈読者〉との新しい関係を形成することを考えてみたい。見おろしや押しつけをやめて、〈読者〉に向き合い、同じ地平に立つこと、そして、できれば、作品を〈作者〉と〈読者〉とで共有すること。少なくとも、作家の側に、各人各様の新しい関係を模索し、とり結んでいく努力をする必要があったと考えられる。

そのことを逆にしていえば、当時よく読まれていた作家たちは、意識的にせよ無意識的にせよ、〈読者〉との何らかの新しい関係を結びえていたのではないか。前掲したリストの名前を挙げれば、大仏次郎にせよ、吉川英治にせよ、石川達三にせよ、広津和郎にせよ、よく読まれた理由があったはずである。

しかし、窪川は、ここまで〈読者〉の問題に深く立ち入りながら、それ以上に進んではいけない。むしろ、「芸術的自由」を保持できた時代の作家として、

芥川龍之介の文学をなつかしく回顧し、羨望する。

芥川龍之介が、人生はボオドレールの詩の一行にも如かない、と言ったことが、誰かによつて引用されてゐるのを読み、私のひとつの考へは、今更のやうに、芥川時代との歴史的な距離を非常に印象づよく与へられたことであつた。

芥川龍之介は、文学に対して何といふ強い観念を持つてゐたのであらう。その強い観念は、高い芸術の境地に、氏を陶醉せしめないで却つて氏を破滅に導いた。(中略) 氏の人生に対する、観念的ではあるが真正面からの態度と、文学についての確乎不動の観念。
(「文学の時代的苦惱」『現代文学論』(同前)所収)

芥川に、『戯作三昧』(大正6(1917)年10月～11月)という作品がある。江戸時代の戯作者曲亭馬琴に仮託して、芸術家としての自画像を描いた作品である。この作品の中で、芥川は、作家と読者の関係を描き、作家と出版社との問題を取り上げ、作家の内部の矛盾にも光を当てていた。

前半の場面で、主人公の馬琴は、聞こえてきた、「眇の小銀杏」なる人物の悪評に対して、それが「一顧の価のない愚論」だと「証明する事が出来」るにもかかわらず、「一度乱された彼の気分は、容易に元通り、落ち着きさうもない」。

「しかし、眇がどんな悪評を立てようとも、それは精々、己を不快にさせる位だ。いくら鳶が鳴いたからと云つて、天日の歩みが止まるものではない。己の八犬伝は必ず完成するだらう。さうしてその時は、日本が古今に比倫のない大伝奇を持つ時だ。」

自身の営為を「天日の歩み」になぞらえ、悪評家を「鳶」にたとえて、彼我の優劣とへだたりを確認することで、馬琴は自信を回復する。〈読者〉の批評は、彼の気分に影響を与えられても、彼の営為に参画することはできない。馬琴は、自身の創作活動を、「芸術的自由」において、自身の内部で完結させているのであり、決して外部の干渉を許さない。小説を書くことはいわば〈聖〉なる営みであり、孤高の、芸術至上の、けだかい作家の像が、馬琴に仮託して描かれた芥川の自画像であり、また、「近代文学」が思い描いてきた作家像であつたといえる。しかし、芥川は、「芥川時代との歴史的な距離」を痛感するのであり、

昭和前期には、その作家像が維持できなくなっていたのである。

『戯作三昧』の中ほどの場面に、馬琴に売れる本を書かそうとする書肆「和泉屋市兵衛」が登場する。馬琴は、「和泉屋市兵衛」の言葉に動揺するが、結局、売れる本の執筆や、〈読者〉への妥協を拒絶する。そこに、「春水」という、為永春水をモデルとした、馬琴とは異質な作家が描かれている。

「それから手前どもでも、春水を出さうかと存じて居ります。先生はお嫌ひでございますが、やはり俗物にはあの辺が向きますやうでございますな。」

「ははあ、左様かね。」

馬琴の記憶には、何時か見かけた事のある春水の顔が、卑しく誇張されて浮んで来た。「私は作者ぢやない。お客様のお望みに従つて、艶物を書いてお目にかける手間取りだ。」——かう春水が称してあると云ふ噂は、馬琴も夙に聞いてゐた所である。だから、勿論彼はこの作者らしくない作者を、心の底から軽蔑してゐた。

この「春水」は、自身「私は作者ぢやない」と称し、馬琴も「作者らしくない作者」とみなす。しかし、春水は本当に、〈読者〉に迎合するだけの「通俗」的な作家だったのか。馬琴と春水とのへだたりは、それほど大きかったのだろうか。

『戯作三昧』において、馬琴も、読者に対する問題や、自身の内部の矛盾を抱える。しかもそれらの問題を未解決のままにして、「夜」の場面では、「恍惚たる悲壯の感激」という「三昧境」に没入していく。問題や矛盾を解決できずに抱えていたという意味では、芥川の文学も、窪川の羨望には値しない。明治・大正の文学も、〈読者〉の問題を内在させていたことは確かであり、外部からの侵入が完全に遮断できていたわけではない。しかし、観念の上において、芸術至上主義は保たれており、「芸術的自由」は、作家のよって立つ基盤として公認されていた。矛盾を内包しつつも、理念として守られ続けた「けだかさ」のモデルが、「近代文学」の典型的な作家像であった。昭和前期の文学界において、その作家像は変更を迫られていたのである。

それでは、作家が〈読者〉との関係を取り結ぶとは、一体どのようなことで

あるのか。芥川の描いた「近代文学」の作家像に対して、対極的な「現代文学」の作家像とはどのようなものなのか。それを考えるための一つの例として、現代の佐伯泰英という時代小説の作家を見ておきたい。この作家は、現代文学の代表者ではなく、むしろ異色の作家である。以下の文章は、新聞のインタビュー記事による。

新聞や雑誌の連載は書かない。単行本では出さず、全作品が「文庫の書き下ろし」だ。だから、単行本を対象とする文学賞とは無縁だし、書評に取り上げられる機会も少ない。ひとつの小説を〈連載→単行本化→文庫化〉と3回転させれば、作家には原稿料に印税が入るのだが、佐伯はそれを望まない。

「連載は、間が空くのが嫌なんです。ほくは自分の小説の最初の読者。書き始めたら早く結末を知りたい。連載だとそれがブツ切りになってしまう。文庫にこだわるのは、時代物の読者の中心は年金生活が多いから。そういう方に出来るだけ安価で、早く小説を届けたいんです」

「文学史に残るような小説を書いているわけじゃない。お手ごろ価格で手にとって、読んでいる2時間だけでも、この世のつらさを忘れていただけたら、結構なんです」

（「逆風満帆 作家 佐伯泰英」『朝日新聞』2008.1.26、2.2、2.9「土曜be」版）

芸術家としての自負や、「文学賞」という権威にもたれかかることなく、この作家は、〈読者〉と一つの明確な関係を築いている。作品は、その作家と〈読者〉との関係の上に形作られている。佐伯において、小説を書くことは、「けだかい」行為ではなく、もっと日常的で平凡な行為である。閉ざされた〈聖〉なる営みではなく、〈俗〉に向かって開かれた営みである。

あるときファンから手紙が届いた。末期がんと闘っている患者からだった。

「病院のベッドで、佐伯さんの本だけが楽しみです」

佐伯は以後、新刊のたびに病院に郵送し、礼状が届くという交流が続いた。その礼状の送り主が、患者の妻に代わった。

「主人は逝きました。最後まで佐伯さんの小説を楽しみにしていましたよ。今までありがとうございました」

読者の顔が見えたと思った瞬間だった。

（同前）

作家の内部に、観念ではない、実体としての〈読者〉が捉えられており、〈読者〉は作家の創作活動に影響を与えている。佐伯において、小説を書くことは、自分の思い描く〈読者〉への発信にほかならない。そして、佐伯の思い描く〈読者〉像は、現実の〈読者〉からの返信によって、不断に更新されているといえる。〈作者〉と〈読者〉とが双方向の関係を築き、同じ地平においてあい対し、作品を受け渡しすることは、決して不可能なことではない。

現代における「ケータイ小説」や「ウェブ小説」の登場、また、『ひぐらしのなく頃に』の流行や、その「アンソロ本」の乱立という現象を見れば、現代においては、一部の〈作者〉は、〈読者〉と同じ地平に立とうとし、作品を共有しようとしているといえる。それは必ずしも「ポストモダン」という語を当てはめるのがふさわしい現象ではないかもしれない。なぜなら、日本の文学史には、既に、〈作り手〉と〈受け手〉とが同じ場に立ち、場合によっては役割の交代さえ可能であった、近世の文学があり、また、『平家物語』のような民衆も参加したコラボレーションの文学が、「古典文学」としてあるからである。むしろ、「近代文学」の標榜する「芸術的自由」の方が、特殊であったかもしれない。

「芸術的自由」を主張して孤立し、内部で完結した作品を書き続ける「近代文学」の作家像は、昭和前期において、崩壊しつつあったのではないだろうか。「芸術的自由」は保持しながらも、〈読者〉と何らかの関係を結び結ぶような、新しい「現代文学」の作家像が模索されていたのではないだろうか。昭和の文学を、また、当時よく読まれた作品を、そのような視点で見たい。それを、昭和期の文学へ向かう際の、私の問題としていきたい。

筆者が述べてきたことは、明治から平成へと向かう文学史の流れは、昭和前期において、大きな断裂に出会い、断裂を越えて続いているということである。断裂の核心にあるのは、〈読者〉の登場と〈作家像〉の変質である。

円本の嵐によって、大地からせりあがるように登場してくる数十万の〈読者〉。その不可解な〈読者〉という断層の前で、多くの既成作家たちがとまどい、立

ちすくむ。しかし、より若い作家たちの中には、その〈読者〉という断層を易々と乗り越えていく者が少なくない。そして、その断層を乗り越えていった作家たちの行方に、現代文学が切り拓かれていったと考えられる。

しかし、時代は戦争へと傾き、作家たちが〈読者〉との関係を取り結ぶ前に、国家というもう一つの外部がより暴力的に、また、戦争という現実が荒々しく、作家たちの内部世界に踏み込んで来る。そうして、これらの問題は、敗戦後に持ち越されていくことになる。

注

- (1) 主要なものとしては、『漱石全集』第27巻(1997.12、岩波書店)の「単行本書誌」、『芥川龍之介全集』第24巻(1998.3、岩波書店)の「単行本書誌」などがある。
- (2) 昭和11(1936)年12月に改定された「宝塚文芸図書館規則」によれば、第7条に「入館料並図書閲覧料ハ無料トス」とあり、第15条には、「本館ノ図書ハ左記ニ該当スル者ニ限り館外携出ヲナスコトヲ得」とあって、その中に「本館読書会会員」と記されている。また、『月報』2号(昭和11(1936)年8月)によれば、「読書会には誰でも入会出来、会費三ヶ月金一円五十銭、この期間中会員は帯出閲覧の特点がある外毎月の月報の配布、催物の案内を受ける事が出来る」と定められていた。
- (3) 『宝塚文芸図書館月報』は、昭和11(1936)年7月から昭和19(1944)年2月まで、計95号の発行が確認されている。巻頭言、諸文章に加えて、「演劇関係文献輯成」として、国内外の新聞雑誌等から演劇関係の記事文章をリストアップして掲載し、演劇関係の専門図書館としての評価を高めた。復刻版が2種刊行されている。1つは、「書誌書目シリーズ」32『近代映画・演劇・音楽雑誌』第2巻～第5巻(牧野守編集、1992.7、ゆまに書房)、もう1つは、「明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成／人文科学編」第17巻～第20巻『演劇・映画』第1巻～第4巻(石山洋ほか編、1996.3、皓星社)である。ゆまに書房の復刻版には、巻末に、牧野守「『宝塚文芸図書館月報』について」という解説が付されており、また、『館報 池田文庫』第3号(1993.4)に、西水卓矢「『宝塚文芸図書館月報』について」という紹介文がある。
- (4) 原田定夫は、『図書館研究 総索引』第3号(1944.12)の「寄稿者名簿・略歴」によれば、大正2(1913)年生まれ。青年図書館員聯盟の会員で、神戸市立図書館に勤務していた。
- (5) 『図書館研究』は、後に言及する「青年図書館員聯盟」の機関誌。1928(昭和3)年1月創刊。同聯盟の解散した1943(昭和18)年12月の第16巻第1号まで発行された。1955年から1960年にかけて、間宮不二雄により全巻の復刻版が刊行されている。

- (6) 戸沢信義は、『図書館研究 総索引』第3号(1944.12)の「寄稿者名簿・略歴」によれば、明治32(1899)年生まれ。大正11(1922)年、大阪商大卒業。同年に阪急電鉄に入社し、のちに宝塚文芸図書館の館長となる。館長着任は、大内昌子「阪急学園そして池田文庫・宝塚文芸図書館」(前掲)によれば、昭和11年頃と考えられる。また、併設される宝塚昆虫館の館長も兼務した。
- (7) 「青年図書館員聯盟」について、『最新 図書館用語大辞典』(2004.4、柏書房)の解説を引用しておく。

1927(昭和2)年11月、阪神地方の新進気鋭の図書館員を中心に結成された連盟。(中略)連盟結成の意図は、宣言(1927年12月)によれば「広く理論的・实际的両方面からの組織的研究を起し、もって図書館文化の絶えざる創造発展を期せんとする」ものであったが、その後の実際活動から見れば、この組織に結集した図書館員がもっとも力を傾注し、また徐々に成果を挙げたのは、図書館用品の規格統一、標準的な分類表・目録規則などの確立、そして図書館運営の能率増進と全国的指導であった。

- (8) 田村盛一は、『図書館研究 総索引』第3号(1944.12)の「寄稿者名簿・略歴」によれば、明治26(1893)年生まれ。青年図書館員聯盟の初期からの会員で、山口図書館、神戸市立図書館、大阪市立清水谷図書館、大阪市立城東図書館を経て、山口経済専門学校に勤務していたという。武居権内『日本図書館学史序説』(1960.3、早川図書)には、「図書記号法」の研究者として名が挙がっており、『山口図書館五拾年略史』(1953)ほかの著書がある。



宝塚文芸図書館・正面 (『京阪神急行電鉄五十年史』(1959.6)より)